

養老孟司会長講演「頭の時代」に生きる高校生にエール

鎌倉市内の県立高校4校の生徒、関係者1200人を対象に鎌倉世界遺産登録推進協議会の養老孟司会長（東大名誉教授）の講演会「ローカルからグローバルへ」が8月28日、鎌倉芸術館大ホールで行われました。先生の専門分野の解剖学の体験を交えて、考えることの重要さを分かりやすい言葉で説き、世界遺産をめざすことは鎌倉時代に対する見方を持つことだとし、人の死の意味を生徒たちに問いかけました。

講演要旨は次の通りです。

世界遺産は自然遺産と文化遺産に二分されるが、文化は人間が作ったもので人でいえば意識の世界、自然は体である。人生は両方で成り立っている。どちらか一方ではだめである。

モノが分かる、モノを学ぶ、モノが分かるということとはどういうことか。「朝^{あした}に道を聞けば、夕^{ゆうべ}に死すと

も可なり」という論語の言葉があるが、「朝に道を聞く」というのは学問をするというので、夕に死んでも思い残すことはないという言葉である。

変わることを学ぶというが、問題になるのは「同じ私」。死体が骨になるまでの姿を描いた「九相詩絵巻」の骨の絵を見たが、あれだけ正確に骨の絵を描いたものはない。鎌倉時代の人の目はそののちの日本人が考える目ではない。非常に透徹した目である。あれだけ死んだ人を見て、あれだけはっきり話に書いて残せるのだ。世界遺産といっても単に手続きの問題である。分かってもらいたかったのは、ある時代、ある考えがちゃんと僕の中に入っているということである。鎌倉を本当に評価しているといえる。平安時代のような都市社会、鎌倉時代はいわば「身体の時代」、江戸時代になって「頭の時代」になる。今君たちは「頭の時代」の中にいる。

「世界遺産登録のために今、何をしていますか？」

～神奈川県、横浜市、逗子市、鎌倉市の取り組み～



橋の架け替えが行われている称名寺庭園 酒井宣子さん撮影

7月はじめの世界遺産委員会で平泉に「記載延期」の結果が出たあとも、神奈川県、横浜・逗子・鎌倉3市では登録の早期実現に向けて、努力を重ねていくことを確認しました。文化庁との協議に基づいて、今後複数回の国際会議を開催し、それを受けて世界遺産の推薦要請を行う方針を固めています。

さらに登録推進の一環として、世界遺産登録推進協議会と加盟団体が中心となって10月には筑波大学大学院世界文化遺産学専攻教授の稲葉信子さんを招いて「ガンバレ鎌倉シンポジウム」を開催、続いてワークショップ「みんなで考える世界遺産おすすめルート」、11月には連続シンポジウム「世界遺産と鎌倉の遺産相続問題」などを開催する予定です。

世界遺産候補地の一つ、横浜市の称名寺では、阿

字池の橋の架け替え工事を行っています。庭園と伽藍が背後の三山と一体となって極楽浄土を表すというたたずまいで、池は寺院の景観の中核になっています。中ノ島を中心に平橋と反橋（太鼓橋）が対をなしていますが、平成19年度の工事としてまず平橋の改修工事が終わり、次いで20年度工事で反橋の改修が進んでいます。昭和末に庭園の発掘調査で橋梁跡が見つかり、重要文化財「称名寺絵図」に描かれた通りの橋の存在が確認されました。直後に絵図に基づいて復元しましたが、その後20年が経過し、腐食が目立っていました。「このままでは危ないという判断で改修を決めた」と横浜市教育委員会では言っています。

一方、名越切通を管轄する逗子市教育委員会では今年度事業として、まんだら堂やぐら群の中にある元の地権者が残してきた廃屋など5、6か所の構築物を解体撤去することになっており、9月から工事に入りました。天井は破れ、柱も折れ曲がり、風が吹き抜ける状態で、このままでは世界遺産登録もおぼつかない状況のところが多いと思われました。解体工事により、候補地としての体裁を整えようという意味もあります。こうした動きは平泉の決定にもかかわらず、世界遺産登録に向けての歩みは変わらないという意思の表れともいえるでしょう。